

先年夏比、狐晝見數日、禁之以弓矢、猶見無止、爰予備食量、狐戶自此之後、狐不見焉、爰知狐有神靈乎、此亭郭內及乾角有古小神社、若其神之所致歟、加之此亭度々免四方火災、及家中放火之殃者乎、  
〔信濃奇談上〕狐

むかしいづれの頃にや、坂井の里に、浦野氏なる男ありて、妻をむかへ子一人もてり、母添乳して晝寐しけるに、此子おき出て母さまこそ尻尾はえたりくと高聲していひければ、この母おどろき、人にえられつる事の耻かと思ひけん、いづ地へか走り行て再かへらず、その夜のうちに、おのが田地に悉稻生たり、こは此母の植たるにやあらん、殊に其としは實のりて、獲もの多くして家さかへ、今この子孫多くなりしに、皆乳の下にまた乳の形あり、幾人となき必そのえるし有り、小笠原歴代記に、長時の妻は浦野彈正忠が娘なり、狐の人に化して産る處なりと、さらば此浦野氏はかの正忠が子孫なるをかくいひ傳へけるにや、

狐妖  
〔消閑雜記〕狐はあやしきけものなり、常に人にばけてたぶらかし、また人の皮肉の内に入りてなやまし、あらぬ妙をなす事多し、抱朴子曰、狐壽八百歲也、三百歲後變化爲人形、夜擊尾出火、戴鬪體拜北斗、不落則變化人、これほど修行なり、功つみたるものなれども、一旦やき鼠の香くはしきを、見て、たちまちにわなにかゝり、命をうしなふ、

〔安齋夜話一〕一狐妖、或問珍といふ書六冊あり、寶永七年、三州田原の學者兒島不求といふ者の著はす所にて、纔の奇怪を辨斷せる問答有之、其中に狐妖を怪みて問し答に、上略其妖怪をなす調子は、草深き野原にて、靈天蓋サレカウベノコト也を拾ひ、己が頂に戴きて仰のき、小計の星を拜す、云々かれども仰のかんとすれば、頂の靈天蓋忽ち落し、又拾ひあげて頂に戴き、右の如くする事數年を積れば、後は北斗を拜し跳り廻りても、修煉して靈天蓋落さず、其時北斗を百遍禮して始て人の形に變化する也、云々、貞丈云、右の狐のばけやうの傳授は、何か唐の書にて見し事ありしが、用にも